

## 異文化交流 — 「聖書の民」ユダヤ民族 —

鈴木元子

Cultural Exchanges — Jews: The People of the Book —

Motoko SUZUKI

### 1. はじめに

日本人はユダヤ人が好きなのか、嫌いなのか。ユダヤ人について知っているのか、知らないのか。インターネットで、書名に「ユダヤ」を含む和書を検索してみると、たちまちの内に500冊以上の検索結果が出てくる<sup>1</sup>。多くの日本人がユダヤ人に出会ったことが無いのに、である<sup>2</sup>。現在、在日ユダヤ人の数は数千人足らず。その大半は短期滞在者で、永年日本で暮らしているユダヤ人は数少ないという。日本ユダヤ教団のシナゴークがあるのは、東京の広尾と神戸の二ヶ所だけである<sup>3</sup>。日本の「ユダヤ人コミュニティ・センター」(The Jewish Community Center、広尾)のパンフレットによると、会員は約150家族で380人と記載されている。その約半数がアメリカ市民で、三分の一がイスラエル市民、あとの残りが日本国籍を含めて様々な国籍を持つユダヤ人だそうである。会員の多くがビジネスマンで、貿易、銀行、金融、保険業、輸送業に携わっており、その他に医者、ジャーナリスト、大学院生、音楽家たちがいる。1988年に日本リサーチ・センターが行ったインタビュー調査からは、ユダヤ人に出会ったことのある人は1%という結果が出ている<sup>4</sup>。しかし、イスラエルが建国52周年を迎え、ローマ法王による聖地訪問もあり<sup>5</sup>、世界的にも国家として目の離せない存在になっている。新聞紙上では、連日、中東和平会議の成り行きが報じられているが、2000年7月8日(土)には、NHKテレビで「N

- 
- 1 三省堂インターネットショッピングの書誌データは、出版社からの刊行データを取次 (= 問屋) を通じて定期的に更新するシステムになっている。
  - 2 第二次世界大戦下において、ユダヤ人の600万人がホロコーストで虐殺され、日本は広島と長崎に原爆投下され、同じく大きな被害を受けた民族という意識がある。
  - 3 東京都渋谷区広尾3-8-8 03-3400-2559
  - 4 駐日イスラエル大使館の広報室に勤務する滝川義人氏によれば、満18歳以上の日本人1,365人を対象にした調査。滝川義人『ユダヤ解読のキーワード』新潮選書 (新潮社、1998年) 参照。
  - 5 カトリック教会は、『大聖年』の『赦しを求める日』("Day of Forgiveness")の3月12日に、パチカンのサンピエトロ大聖堂で特別ミサを開き、過去の過ちを公式に謝罪した。これは歴史上初めてのことであった。7つの罪を告白してから、イスラエル民族に対しては、「父なる神よ、あなたはアブラハムとその子孫を、あなたの名を世界にもたらすために選ばれました。歴史を通して、あなたの子らを苦しめてきた人々の行為を深く悲しみ、あなたの赦しを願い求め、『契約の民』との真の兄弟愛を築くために働くことができますように」と祈った。この時、具体的な歴史的事件の言及はなく、これを物足りないとする人々もいたが、この告白の背後には、異端審問や十字軍、暴力的な改宗強制、ホロコーストでの沈黙、ユダヤ人差別などを認めてのものであると理解されている。パチカンはこれに先立つ3月7日に、『記憶と和解 教会と過去の過ち』(Memory and Reconciliation: The church and the faults of the past)と題する文章を発表し、カトリック教会の歴史的罪を活字にして表明していた。この懺悔表明の後、ローマ教皇はイスラエル聖地旅行に旅立った。

HKスペシャル：ミレニアム紀行 エルサレム」と題して、約1時間の番組が放映された。ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒が共存する都市、三大聖地という視点からであった。

イスラエルは、アジア大陸、アフリカ大陸、ヨーロッパ大陸という三大陸のへその緒のような存在である。アブラハムの父が商売をしていたのは、シルクロードの西端、ハランという商業で栄えた町（シリアの北）であった。イスラエルの緯度は、日本の九州南部にほぼ相当し、面積は四国と同じくらいである。時差は7時間（夏は6時間）日本より遅い。三大宗教の聖地となっているエルサレムの街は、薄いペーージュのエルサレム・ストーンで統一され、丘の斜面に沿って建つ、「山上の町」<sup>6</sup>のような都市である。実際、エルサレムは、海拔700～800メートルの高さにある。

ユダヤ人は約二千年間、世界中に離散し（離散民＝ディアスポラ）、民族絶滅の危機を何度も経験しながら、民族としてのアイデンティティーとユダヤ教を保持してきた民族である。旧約聖書の律法を昔ながらに守っている彼らの姿は、そのauthenticityのゆえに、新鮮で魅力的でさえある。欧米のキリスト教界にあっては、これまで「置換神学」<sup>7</sup>のために切り捨てられ、むしろ迫害すらされてきたユダヤ民族たちに、むしろ習おうとする気運さえ興り始めている。

この小論においては、ユダヤ人たちが「聖書（本）の民」（the People of the Book）と呼ばれるその所以について、彼らの文化に触れながら論考していくつもりである。

## 2. 歴史

ユダヤ教は古代オリエントに発生し、現在約1500万人の信徒を擁する。ユダヤ教とは、唯一の神の啓示を受けた民族が辿った歴史の軌跡と言われている。

前2千年紀初頭、ヘブライ人アブラハムが神の声を聞き、約束の地カナン（後のパレスチナ）へ移住したことで、ユダヤ民族の前史は始まる（アブラハム契約）。族長アブラハムの孫ヤコブは、別名イスラエルを与えられ、彼の十二人の息子は後に十二部族の祖となる。飢饉を逃れてエジプトに移住し、民衆の数も増大するが、その子孫は奴隷とされ苦役に苦しむ。神の召命を受けたモーセが指導者となり、民衆はみなエジプトを脱出する。シナイ山で神と契約を結び（シナイ契約）、このヤーウェ神はイスラエルの「唯一の神」となり、イスラエルは主の「選民」となる。この契約を確認するために、仲保者モーセに与えられた律法が、民族的・宗教的共同体イスラエルの生き方を決定する基本法となった。

こうして前13世紀末に、イスラエル人はカナンに定住する。前1千年頃、ユダ族出身のダビデが王となり、シリア・パレスチナ全域に及ぶ大帝国を建設し、エルサレムを首都に定める。その子ソロモンが、エルサレムのシオンの丘に神殿を建てると、神はダビデ家からイスラエルの王（メシア）が出ることを約束し、シオンをその唯一の場所に定める（ダビデ契約）。

前586年にユダ王国は滅亡し、エルサレム神殿も破壊されて、古代イスラエル時代は終焉する。その後、約半世紀に渡り、バビロン捕囚の辛酸を嘗めた後、前538年にペルシャのキュロス2世が捕囚民の解放令を發布すると、一部のユダヤ人は故国に帰り、エルサレム神殿を再建する（第2神殿）。これらは、旧約聖書に記述されていると同時に、ユダヤ人の歴史である。

6 「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。」（マタイによる福音書5章14節）以後の引用も、『新共同訳聖書』（日本聖書協会）による。

7 「イスラエル」（に与えられた祝福）は、「教会」に取って代わられたとする解釈。

その後、西暦70年にローマ帝国に破れ、第2神殿は破壊される。ユダヤ人たちはマサダに立てこもるが、それも73年には陥落してしまう。ここでまたユダヤ人たちは、他国へと離散していくのである。

最初は神殿祭儀を宗教活動の中心にするが、バビロン捕囚下の神殿のない状況下において、神殿祭儀なしでも民族的・宗教的共同体を維持しなければならない必要に迫られる。そこで、エズラは、前5世紀中葉にバビロニアから「モーセの律法」の巻物を携えてくると、公衆の面前で朗読し、解説をし始めた（ネヘミヤ記8:1-12）。エズラは、律法を変化する実生活に適用する方法を教えた最初の律法学者である<sup>8</sup>。第2神殿時代あたりから、礼拝と律法研究のために、安息日に各居住地の成員が集まる「シナゴーク（礼拝所）」が発達していった。

### 3. 『ルブリンの魔術師』の中の「ユダヤらしさ」

イディッシュ語作家として、初めてノーベル文学賞を受賞したアイザック・B・シンガー（1904 - 91）<sup>9</sup>の代表作品の一つに『ルブリンの魔術師』<sup>10</sup>がある。今年、日本語にも翻訳されたばかりである。シンガーは、一貫してポーランドを舞台にした、古き良き「ユダヤらしさ」を書き続けた作家である。「ユダヤらしさ」とは何かを紹介するために、ここに少し引用してみたい。

ユダヤ人の主人公である魔術師のヤシャが、旅の途中で土砂降りにあい、雨宿りのつもりでシナゴークの中に入って行く場面である。夜遅い礼拝で、数人の男たちが朗唱をしている最中であつた。

ユダヤ人が導入の祈りを唱えるやり方も、どんなふうに彼らが祈禱用ショールを身につけ、房付きの衣に口づけし、聖句箱を巻きつけ、革ひもを解くかも。そうしたことはすべて、彼には奇妙なほど縁遠いものだったが、それでいてなじみ深かった。……彼はこの共同体の一部だった。この共同体の根は彼の根だった。彼の体にはそのしるしがあった。（88頁）

シナゴークを出て行く時に、彼は聖書から外れたぼろぼろのページが一杯詰った樽に目を留め、懐かしさのあまり、ズボンのポケットに入れてしまう。

樽をがさがさ探してみると、破れた本に行き当たった。ぼろぼろのページから気高い香りが立ちのぼり、まるでそれらは樽の中に身を横たえながら、ひとりでに読まれ続けていたかのようだった。（89頁）

ワルシャワに行く途中の宿屋では、ユダヤ人の女主人がヤシャのポケットに押し込まれたも

8 「ヌンの子ヨシュアの時代からこの日まで、イスラエルの人々がこのような祝いを行ったことはなかった。それは、まことに大きな喜びの祝いであった。」（ネヘミヤ記8:17）

9 ポーランドのワルシャワで作家活動をしていたが、兄を頼ってニューヨークに移住。イディッシュ語で書かれた短篇「ばかものギンペル」はソール・ペローの手で英訳され、一躍英語世界で脚光をあびることになる。しかし、アメリカに渡って約40数年、作品は終始一貫してイディッシュ語で書き続けた。

10 アイザック・バシェヴィス・シンガー（大崎ふみ子訳）『ルブリンの魔術師』（吉夏社、2000年）。書評は、朝日新聞朝刊（2000年3月12日付）に掲載されている。

のを目ざとく見つけて、声をかけてくる（ヤシャはこの時、ユダヤ人であることを隠し、ポーランド人になりすましていたのである）。

「だんなさん、わたしにおくんなさい。どのみちお分かりになりませんから。わたしたちにとっては、神聖なものです。」「ちょっと見てみたいんだ。」「どうしてそんなことができます？ ヘブライ語で書いてあるんですよ。」

……「やめとけ」と、彼女の夫が離れたところからうなるようにイディッシュで言った。「わたしゃ、この人にユダヤの本を持ち歩いてほしくないんだよ」と、彼女は食ってかかるように答えた。(90頁)

これは小説のほんの一場面である。しかし、この何気ないユダヤ人の生活のひとこまを説明するにも、聖書が必要になってくる。

#### 4. 祈禱と聖句箱

旧約聖書のダニエル書に、「ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた」(6:11)とある。正統派ユダヤ人たちは、朝、昼、晩と、一日に三度、アミダー (amidah 立禱) を起立して唱える。実生活の例としては、日の出と共に起き、手を洗って、食事までの30分くらい祈禱を唱える。家で祈禱してもいいが、近くのシナゴークに行って、信仰仲間と共に礼拝する。帰宅し、また手を洗い、食前の短い祈りをする。食後また祈る。午後は正午から日没までに、5分くらいの短い祈りを唱える。夜は近くのアカデミーに行って勉強する、というパターンだそうである。

唯一の神に対するユダヤ人の中心的信仰告白は、「シェマ・イスラエル」(Shema' Israel 聞けイスラエル) といい、旧約聖書の申命記6章4節以下の聖句を指す。

この「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」(申命記6:4-5)をヘブライ語で書き付けた羊皮紙を折り畳んで収めた革の小箱が、「テフィリン」(tefillin 聖句箱)で、一つは左上腕に、もう一つは額<sup>11</sup>に巻き付けて朝禱を捧げる。「これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け」(申命記6:8)の言葉通りに。

「アミダー」は本来18項目の祈禱であったことから、「シュモネー・エスレー」(shemoneh-esreh 18の祝禱の意)と呼ばれている。立禱は個人で祈っても良いが、正式には成人男子10人以上の集団(ミヌヤン minyan)で祈る。人数が足りない時は、どこか外に行って連れてくる。また、「メズーサ」という聖句の小箱は、2cm × 10cm程度の表札のようなものもあり、これはお店やレストランの入り口に掛けておく。「あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」(申命記6:9)の戒めが忠実に守られている。家の戸口にかけると、家の中に

11 終末について記されたヨハネの黙示録によれば、人類は終局、額に「神の刻印」(黙示録7:2, 3, 4, 5, 8, 9:4)を押される者と「獣の刻印」(黙示録13:16, 17, 14:9, 11, 16:2, 19:20, 20:4)を押される者に二分される。(ユダヤ人はすでに、「聞け、イスラエルよ」の聖句を額に付けているようだが、何かこれと関係があるのだろうか。)

いる人たちは、神によってすべての悪から守られるという。

シンガーの小説に出てきた「房付きの衣」については、「代々にわたって、衣服の四隅に房を縫い付け、その房に青いひもを付けさせなさい。それはあなたたちの房となり、あなたたちがそれを見るとき、主のすべての命令を思い起こして守り、あなたたちが自分の心と目の欲に従って、みだらな行いをしないためである」（民数記15:38-39）を典拠にしているのではないだろうか。シナゴグにおける礼拝でも、房付きの青い線の入った祈祷用ショール（タリート）を男性たちは身につけて、世俗社会での身分や財産を覆うという。人間の平等が尊重されているからである。ちなみに、1896年、『ユダヤ人国家』という小冊子を書いたテオドル・ヘルツェル（Theodor Herzl）の呼びかけで、その翌年、スイスのバーゼルでシオニスト会議（世界ユダヤ人会議）が開催された。この時、エルサレムにヘブライ語の大学を建てること、ユダヤ国民基金の創設、入植運動に資金を提供するためのユダヤ世界銀行をロンドンに開設することなどが話し合われた。国歌は、ヘブライ語で書かれた「われらが望み」（ハクティバ）になり、国旗は、伝統的なタリート（祈祷用ショール）の色である青と白で、「ダビデの星」を紋章にすることが決められたのである。

## 5. 体のしるし 「割礼」

体のしるしとは、割礼のことである。男児は生後8日目に割礼を受け、同時に命名される。ユダヤ人は、「モーシェ」や「ダビッド」のように、聖書の人物名から命名することが多い。

割礼とは、新生児の男性器の包皮を切り取ることで、ヘブライ語でブリット・ミラー（Brith Millah 契約のしるし）と呼ぶ。神が契約の証しとして、アブラハムとその子孫に割礼を命じた創世記17章9節～14節に端を発している。

「...いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、...割礼を受けなければならない。...それによって、わたしの契約はあなたの体に記されて永遠の契約となる。包皮の部分を切り取らない無割礼の男がいたなら、その人は民の間から断たれる。」

この新しい契約は、アブラハムが99歳で個人的に神から預言を受けた時のことである。全き者であることが要求され、またアブラムにアブラハムという新しい名前が与えられ、さらには、翌年妻サラとの間に男児が与えられるという預言と共に命じられた事柄であった。この神の言葉により、アブラハムは99歳にして早速、当時13歳の息子イシュマエルや奴隷たちと、また家にいる全ての男性たちと共に、割礼を受けた（創世記17:22-27）。

翌年、「アブラハムは、サラが産んだ自分の子をイサクと名付け、神が命じられたとおり、八日目に、息子イサクに割礼を施した」（創世記21:3-4）とある。これに倣って、ユダヤ人は生後8日目に割礼式を行うのである。

ユダヤ教の儀式では、サンダック（名付け親）が赤ん坊をひざに抱えて、両手でその両足を捕まえて、モヘルという割礼儀式のエキスパートが、性器の包皮を長く引っ張り、それをクリップのような「盾」で挿み性器自体が傷付く事を防ぎながら、包皮に鉗を入れる。儀式の後で、脱脂綿に祝福のワインを含ませて泣く子供の唇を湿らせる。



その後で、家族と客人が祝いの食事を共にする。……この割礼によってユダヤ民族はそのアイデンティティを保持してきた。十九世紀には、改革派ユダヤ教のラビたちが割礼を廃棄するよう求めた時期もあった。しかし現在のイスラエル国では、ほとんど例外なく非宗教的ユダヤ人も子供に割礼を施す。この事実は、割礼が確かに単なる宗教儀式以上のものであることを証している。<sup>12</sup>

割礼を施すことにより、新生児が「アブラハム契約」に参加して、ユダヤ人共同体の一員になったことを示す。受ける本人は知らぬうちに割礼を受けるわけだが、その「体のしるし」により、自分がユダヤ人であることを自覚する。異邦人にその心境は図り難いが、盲腸の傷や火傷の痕、事故の傷などを見るたびに、その出来事を思い出すのが人間であることを思う時、その意味は大きいと想像に難くない。たとえ信仰が弱まって、体のしるしが消えることはないからである。キリスト教の霊のしるしである洗礼<sup>13</sup>に対する、ユダヤ教の肉のしるしである割礼は、たとえそれがまだ本人の記憶にない赤ん坊の時のことであっても、いつもユダヤ人であることを想起させ、人生の半ばで、「ユダヤ人のしるし」を捨てることはないであろう。死期の近づいた父親は、息子をベッドの傍らに呼び、「息子よ、一生、ユダヤ人であり続けてくれ」と言うという。

## 6. キッパに代表される服装

伝統的ユダヤ人は、神に対して頭を隠すために帽子をかぶる。小さい円形の布の帽子がキッパである。正統派のユダヤ人男性は、全身黒づくめの服装をしているが、それは中世ヨーロッパのユダヤ人たちが最も質素だと考えて着用していた服装である。

エルサレムの新市街の北東に、敬虔な正統派ユダヤ人たちの住んでいる「メア・シェリーム」(Mea Shearim) という町がある。1874年に造られたこの町の名前は、創世記26章12節の「イサクがその土地に穀物の種を蒔くと、その年のうちに百倍もの収穫があった」の「百倍」という言葉に由来しているという。道行く人は、男性なら長いもみあげに山高帽とフロックコートの黒づくめ、女性はくるぶしまであるスカートで、既婚者なら頭を毛糸の帽子で覆っている。住民たちは、聖書の律法の全てを忠実に守って暮らしている。聖なる言葉であるヘブライ語は礼拝用の言葉なので、日常生活はイディッシュ語を使っている。宗教用品や骨董店など見所も多いらしいが、観光客もノースリーブやショートパンツは禁じられている。偶像礼拝を避けるために、写真に映るのを嫌う住民も多いという。

12 沼野充義編『ユダヤ学のすべて』(新書館、1999年) 32頁。

13 本人の自由意志による洗礼の場合、信仰の継承は中々困難である。アメリカのニューイングランド植民地では、17世紀末になると、悔悛の経験を持つ息子や娘たちが少なくなり、幼児洗礼のままで終わってしまう者が増し始めた。1657年ついにボストンの植民地連合牧師会議は、教会員の子どもたちが悔悛の経験を持たなくても、教会員たる資格と彼らの子どもの洗礼を許可する決議を行った。この妥協が有名な「半途契約」(Half-Way Covenant) と言われるもので、1622年のマサチューセッツ教会会議を経て、全マサチューセッツの教会に適用された。1677年には、未悔悛の教会員の聖餐式も許されていく(ストッダード主義)。これにより教会員は増加したが、聖徒の群れとしての教会は崩れ、教会における霊的な交わりは影をひそめ、単に社交の場へと墮落し、ピューリタニズム自体が凋落の運命を辿っていった。(曾根暁彦『アメリカ教会史』、日本基督教団出版局、1974年、1989年、91-93頁)。

## 7. 手を洗い清める習慣

日本の神社の入り口付近には手水舎（てみずや）があるが、これより古く、古代イスラエル神殿に、神殿の内庭に「洗盤」または「青銅の海」と呼ばれる禊ぎの場があった。これは手と足を洗い、心身を清めるためのものであった。今でも伝統的、正統派のユダヤ教会堂（シナゴグ）には、入り口付近に手を洗う水の栓がずらりと並んでいる。

主はモーセに仰せになった。洗い清めるために、青銅の洗盤とその台を作り、臨在の幕屋と祭壇の間に置き、水を入れなさい。アロンとその子らは、その水で手足を洗い清める。……これは彼らにとっても、子孫にとっても、代々にわたって守るべき不変の定めである。（出エジプト記30:17-21）<sup>14</sup>

これは、筆者がエルサレムを訪れた際に撮った、「エルサレム嘆きの壁」の前にある、手を洗う場所である。



（1999年9月撮影 筆者）

## 8. 食習慣コシェル

食べ物についても、聖書にある、食べて良い物と食べてはいけない物の食物規定に従った食生活が守られている（カシュルート kashrut、適正食品規定）。

ユダヤ教の食習慣を、「コシェル」という。まず肉については、「地上のあらゆる動物のうちで、あなたたちの食べてよい生き物は、ひづめが分かれ、完全に割れており、しかも反すうするものである」（レビ記11:2-3）。牛、羊、鹿は大丈夫だが、「豚」（レビ記11:7-8, イザヤ書65:4, 66:3, 66:17）、ウサギ、ラクダは食べない。食べられる肉も、厳格なガイドラインのもとに屠殺され、「いかなる生き物の血も、決して食べてはならない」（レビ記17:14）の命令を守り、完全に血を全部抜き出している。まず、動物を殺してから肉は30分間水につけ、岩塩をふりかけ、その塩で血を吸い出す。吸い出された血は洗う。肝臓や心臓のように血の気の多い部分は、

14 その他にも、詩編26:6などの聖句もある。

火であぶって血を全部蒸発させる。

魚に関しては、「水中の魚類のうち、ひれ、うろこのあるものは、海のものでも、川のものでもすべて食べてよい。しかしひれやうろこのないものは、海のものでも、川のものでも、水に群がるものでも、水の中の生き物はすべて汚らわしいものである」（レビ記11:9-10）の聖句から、日本人が好きなエビ、タコ、イカ、貝類、ウナギなどは食べない。

さらに、聖書の「子山羊をその母の乳で煮てはならない」（申命記14：21）という規定から、肉と乳製品は一緒に取らないという決まりになっている。エルサレムの中心街にある最も賑やかなベン・イエフダ通り、キング・ジョージ通り、ヤッフォー通りに囲まれた三角地帯では、これまでカシュルートを守ったバーガーキングのみであった。ところが、最近、マクドナルドやケンタッキー・フライドチキン、ミスタードーナツなどのファーストフード店が進出してきた。特に、マクドナルドでは肉製品と乳製品の合体したチーズバーガーもメニューに出しているが、勿論、敬虔なユダヤ教徒は口にしない。

豚肉を食しないということは、ベーコンやハムも食べないことで、これはユダヤ人が非ユダヤ人（異邦人）と一緒に食卓につくことを困難にし、かつユダヤ人が他民族から疎外される大きな原因になってきた。歴史的には、スペインなどでローマ・カトリック教に強制改宗させられたユダヤ人（マラーノ Marrano）<sup>15</sup> たちが豚肉を食べないことが判明すると、異端として罰せられたり、火あぶりの刑に処せられた時代があった。それにも関わらずこの食物規定を守ってきたのは、その食物の栄養の有無や健康に良い悪いの問題ではなく、ただ単純に神が食べるなど命じたから食べないのである、とあるラビは明答している<sup>16</sup>。

下記の写真は、日本で唯一と言われている東京の江古田駅近くにあるイスラエル・レストラン「マーシャイム」の、典型的なイスラエル料理のメニューである。



(2000年8月撮影 筆者)

15 「マラーノ」とは、イベリア半島の改宗ユダヤ人への蔑称。古いカスティリヤ語で「豚」の意。1391年に始まった強制改宗以来、多くは豚肉を口にせず、自分の家で安息日や過越の祭を守るなど、密かにユダヤ教の教えを実践していた。

16 ラビ・M・トケイヤー『ユダヤ五〇〇〇年の知恵』（講談社、1997年）181頁。



## 9. 聖書

異郷に住むユダヤ人は剣を持っていなかった。持っていたのは、剣ではなく、聖書であった。アメリカ・ユダヤ系作家ソール・ペローは、『雨の王ヘンダーソン』<sup>17</sup>の中で、ユダヤ人がローマ兵に負けたのは、安息日に戦わなかったからだとして主人公の口を借りて語っている。

ヤーウェ神を信じるユダヤ人たちは、人間をヒーロー視することも少なかった。聖書にこそ、王冠をかぶせたのである。聖書を王様とし、どんなことでも聖書に聞くことを民族の習慣としてきた。



日本ユダヤ教団 広尾のシナゴーク  
(2000年8月 撮影 筆者)



王冠を被ったトーラー（聖書）収納所の垂れ幕  
トーラーの上に王冠、左右にライオンの刺繍 ▶  
(2000年8月 撮影 筆者)

聖書の正典化<sup>18</sup>については、ユダヤ教団では最も重要な 律法 は前4世紀中に、続いて 預言書 が前3世紀中頃までに正典化され、 諸書 は前2世紀中頃に大体公認されていったという。ヘブライ原典に属する書物がすべて最終的に正典として公認されたのは、後70 - 90年にヤムニアで開かれたラビたちの会議においてであった。ローマに対するユダヤ人反乱の第一次ユダヤ戦争（66 - 73年）が鎮圧され、ユダヤ教団の拠点であったエルサレムとその神殿が破壊され、ユダヤ人は立ち入り禁止になった。このような状況下にあつて、ユダヤ教の指導者たちは、唯一依拠すべき正典の最終決定を迫られたのである。

ユダヤ人たちの聖書は、トーラー（モーセ五書）、ネヴィム（預言書）、ケトゥヴィム（詩編など）の順番で、キリスト教の旧約聖書とは内容は同じだが、並び方が異なっている。

イスラエルの「ジョージ・ワシントン、すなわち建国の父」と呼ばれるダビッド・ベングリオン（イスラエル初代首相）は、聖書をよく読んだ人であった。自分の民族の長い歴史や、自分たちが如何に重要であったか、そして今も重要であるかを思い起こさせてくれるからだ。80歳半ば、米国人伝記作家とのインタビューで、彼はこう語っている。「私たちユダヤ人はほかの民族とは違います。わたしたちは独特な人種なのです。わたしたちは聖書の民ですから、確かにある特種な資質があるのです。律法のルールを、ほかの民族より私たちの方が大事に思っ

17 Saul Bellow, *Henderson the Rain King* (New York: The Viking Press, 1959)

18 山折哲雄監修 『世界宗教大事典』（平凡社、1991年）1070頁参照。

ています。それは、ユダヤ教がモーセの律法に基づいているからです。……」。そして、最後に彼はこう結んでいる。「一生懸命働いて、選民にならなければなりません。世界中の国の光となるために」<sup>19</sup>。ベングリオンにとっては、「選民である」というよりも、「選民になる」という意識の方が強かったようである。

次に、『タルムード』(Talmud)は、ユダヤ教の世俗的および宗教的法規の集成で、トーラーへの注釈を含むものである。タルムードは、法典部分であるミシュナと、ミシュナへの注釈であるゲマラからなる。タルムードに含まれる素材のうち、法的問題に関する律法学者たちの決定について述べてあるものをハラハーと言い、伝説や逸話や格言などはハガダー(アガタ)と呼ばれている。パピロニア・タルムードは、3～6世紀の初頭にかけて、パピロニア在住の学者たちによって執筆されたものである。タルムードは文学であり、紀元前500年から紀元後500年までの口伝を、10年がかりで、2千人の学者が編纂したもので、文化、道徳、宗教、伝統が伝授される、いわばユダヤ人5千年の知恵と評されている。

手で書かれたタルムードは、1334年の物が現存している中では、最古の物である。1244年にパリにあったあらゆるタルムードはキリスト教徒によって没収され禁書にされ、24台の荷車に積まれて焼かれてしまった。1415年にはユダヤ人がタルムードを読むことが禁じられ、1520年ローマでもタルムードは全て押収されて焼かれている。その後も数度に渡って(1553、1555、1559、1566、1592、1597年)、タルムードは焼かれ、または教会の検閲を受けて、切り抜かれた(1562年)。しかし、現在、タルムードは数カ国語に翻訳され、タルムードに対する関心は世界的に高まっている。最近、日本語訳の刊行も進められているそうである。現在、タルムードは、全20巻、1万2千ページに及び、語数にして250万語以上、重量75キロという膨大なものになっている。

## 10. 教育の中心も聖書

日本の「教育ママ」に対して、「ジューイッシュ・マザー」という言葉があるくらい、この二つの社会は共に上昇志向が強く、教育熱心である。識字率が高かった点でも世界に類を見ない。

ユダヤ人少年は13歳になると、「バル・ミツヴァー bar mitzvah」(戒律の子)と呼ばれる成人式を迎える(少女は12歳)。少年は、群集の前で誇らしげに巻物となったトーラー(モーセ五書)を読むのである。これは、成人になって初めて礼拝の先導を勤めることができるようになったという喜びの意味を表わしている。

ユダヤ人たちがディアスポラとして、世界各国で暮らしている時、その土地の言語(もしくはイディッシュ語)を日常生活に使いながら、聖書はヘブライ語で読んできたのである。つまり、ユダヤ人の家に生まれた子どもたちは、聖書を読むために、民族の言葉、ヘブライ語を勉強しなければならなかった。ロシア系移民の子であったソール・ペローも4歳にしてヘブライ語で創世記を暗記するというユダヤ式教育を受けている。ヘブライ語は難しい言語で、これがマスターできるようなら、他の外国語の習得など容易なことであった。概して、ユダヤ人は外国語に強く、年配者なら5～6ヶ国語を話せる人がざらにいる。さらには、語学教育を幼児期から受けるために、その子どもたちは自ずと頭脳が鍛えられ、秀才や天才が多く生まれてきた。

19 ロバート・セントジョン『ユダヤ人の国を創った人』(ミルトス、1989年) 224、226頁。

また、歴史的に土地の所有が許されなかったディアスポラのユダヤ人たちは、農民にならずに、得意の語学力やユダヤ人同志の人脈を生かせる商人になる者が多かった。

ユダヤ教やタルムード的伝統によると、学者が社会のエリートとみなされてきた。学者は、皆が熱望する理想であった。もし自分が学者になれなければ、少なくとも自分の子どもは学者にしたいと願う親が多かった。タルムードの中に、「あらゆるものを売っても娘を学者にとつがせること、または学者の娘をもらうために家のすべての財産を失ってもよい」<sup>20</sup> という言葉さえあるくらいである。

ユダヤ人たちは次世代を担う子どもを生み育て、教育することを民族（ユダヤ人社会）の大きな使命と考えてきた。教育の重要性については、イスラエルの神が聖書の中で厳しく説いているからである。

またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見ただけを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい。……（申命記4:8-10）

子どもたちに聖書を教えることが如何に大切かは、繰り返し強調されていることである。「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。」（申命記6:6-9）

死ぬ間際の、モーセの最後の勸告においても同様であった。「子供たちに命じて、この律法をすべて忠実に守らせなさい。それは、……あなたたちの命である。」（申命記32:46-47）

ユダヤ人は、本（聖書）を学問することによって、本来の「ユダヤ人になる」という。タルムードの中にこんな話がある。

#### 「知識は宝」

ある船上での話。船客はみな大金持ちで、その中に一人のラビが乗り込んでいた。金持ちたちは、お互いに富の比較をしていた。するとラビが、「私がいちばん富んでいる人間だと思うけれども、いま私の富を皆さんに見せることはできない」と言った。海賊が船を襲った。金持ちたちは金銀宝石、すべて自分たちの財産を失った。海賊が去ったあと、やっとのことで船はある港に着いた。ラビはすぐ教養が高いことをその港の人々に認められ、学校で生徒を集めて教えはじめた。しばらくたって、このラビは船と一緒に旅行したかつての金持ちに会ったが、みんなみじめに零落していた。そしてその人々は「確かにあなたは正しかった。教育のある者はあらゆるものを持っているのと同じだ」と言った。ここから、知識は常に奪われることなく持って歩けるから、教育がいちばん大切なものだという話が起った。<sup>21</sup>

現在イスラエルの義務教育は、国立が一般校と宗教学校、私立は各正統派の独立トラー校

20 ラビ・M・トケイヤー 『ユダヤ五〇〇〇年の知恵』（講談社、1997年）178頁。

21 ラビ・M・トケイヤー 『ユダヤ五〇〇〇年の知恵』（講談社、1997年）57頁。

でなされている。5歳から15歳までは義務教育で無償。小学校6年制、中学校3年制、高校3年制。かつては普通校でも聖書を教科として教えていたが、労働党政権の時に廃止された。これが、若者の宗教離れの一因と見なす向きもある。しかし、全体の20%を超える児童（18.3万人）が、国立の宗教系校で学んでいる。国民は、授業でヘブライ語を使用する学校と、アラビア語を使用する学校のどちらかを選ぶことができる。ヘブライ語の学校でも、小学校高学年になるとアラビア語を教えている。商業言語である英語を話す国民は多く、英語は小学校最終学年から教科となっている。イスラエルの国民は、1948年の建国後に本人ないし親が他国から移住してきた人々なので、ほぼ全員が2言語以上を話す。新たな移住者は「ウルパン」（Ulpan）という政府のヘブライ語学校で学び、仲間内では従来の言葉を話している。

イスラエルでは、18歳から男子3年、女子1年9ヶ月の義務兵役がある。ちなみに、女子の徴兵制を採用しているのは、世界でもイスラエルだけである。イスラエル軍は、最新鋭兵器を装備したプロ集団ではなく、主力は徴兵義務に服している若者か、普段は軍務と関係のない仕事をしている一般市民により構成されていて、国民軍・人民軍の性格が強い。兵役に就くことは、シオニズムやイスラエルという国家の存在意義を教える場ともなっており、ディアスポラにあったユダヤ人帰還民の多いイスラエル国にあって、アイデンティティ確立の場、つまり「国民統合のプロセスでもある」<sup>22</sup> という声もある。

ほとんどの学生は、高校卒業後すぐに軍隊に入隊する。兵役後、大学に入学するが、最近では、兵役後に見聞を広めるために、海外旅行に出ることが好まれているようである。そこで、大学に入学するのが21歳～23歳の場合が多いが、イスラエルの大学は3年制で、二つの学部の間を専攻することになっている。たとえば、英文学と経済といった具合にである。

ユダヤ人には、生涯学習という言葉がふさわしい。ユダヤ人にとって、勉強することは、人生の最大の目的だからである。ユダヤの古いことわざに、「勉強は正しい振る舞いを作る」というのがある。キリスト教では、イエス・キリストを信じることによってキリスト教徒になるが、ユダヤ教の場合は、振る舞いこそがユダヤ人をユダヤ人にするのだという。

## 11. 復活した言語 「ヘブライ語」

旧約聖書の言語がヘブライ語である。ヘブライ語は、アラビア語やエチオピア語、アラム語と同じセム語族に属する。文字は22字、数字もこの22字で表せる。右から左に書き、名詞には男性・女性の別がある。母音は、日本語のように5種類。日本語のように子音と母音からなった音（たとえば、ka、bi、meなど）が多いので発音はしやすい。

ヘブライ語は、歴史的には、紀元前10世紀まで遡ることができる。紀元前6世紀、バビロン捕囚が起こると、ペルシャ帝国の公式言語であったアラム語が話し言葉となり、書き言葉も次第にその影響を受けていく。紀元200年頃まで、パレスチナでは話し言葉の一つとして使われていたが、ローマに破れ、離散してからは、聖書と礼拝、祈祷だけに用いられるようになった。

そこで、離散地でヘブライ語は「聖なる言葉」（ラション・ハコデッシュ）と呼ばれ、男子は聖書を詠唱し、戒律を学ぶために、共同体の寺子屋式の学舎（ヘデル）でヘブライ語を習った。ユダヤ人の識字率が周辺諸国に比べて、非常に高くなったのはこのためである。

22 立山良司『揺れるユダヤ人国家 ポスト・シオニズム』（文藝春秋、2000年）119-120頁。

中世のドイツで、ユダヤ人たちは中世ドイツ語を使っていた。ドイツを追われ、ポーランドやロシアに住み着いても中世ドイツ語を使用し、東欧のゲッターにいたユダヤ人も、ドイツ本国においては中世ドイツ語が現代ドイツ語に変化していくそのさまからは切り離されていた。また、非ユダヤ人に分からないようにするために、自分たちの言葉にヘブライ語の単語をくっ付けたり、言葉をわざと変形させたりした。これがイディッシュ語の成り立ちである。同じことが中世スペインにも起こり、これはラディーノ語として知られるようになった。

19世紀末にシオニズム(ユダヤ民族主義運動)が起こると、ベン・イエフダー(Ben Jehuda)<sup>23</sup>はヘブライ語の復活運動を開始した。ベン・イエフダーが高校に行っている頃のことである。ブルガリア解放が起きた。この時、ブルガリア人が解放されるなら、ユダヤ人が解放されてもいいのではないかと考えるようになった。そして、ユダヤ民族を解放し、ユダヤ人を父祖の土地に住まわせる運動に命を捧げる覚悟をするのである。さらには、自分たちの国を手にするためには、みんなを一つに結び付ける言語が必要だと考えるようになる。ラビや学者のヘブライ語ではなく、実生活に用いることのできるヘブライ語である。死んで年月のたった言語をよみがえらせる必要があった。昔、バベルの塔を作った人間を怒って、神が人々の言語をそれぞれ違ったものにして散らした、とあるが、今度はその逆を行かなければならなかった。すなわち、ユダヤ人の統一のために、共通の言語を持つことが必須だったのである。

二千年前にはなかった物や考えについても、言い方をみつけなければならなかった。たとえば、蒸気機関車は、蒸気に当たる言葉と機関に当たる言葉を合わせる。こうして、世界中のヘブライ語文学を読んだり、図書館で調べたり、かつてはあったが消えてしまった言葉の痕跡を探さなければならなかった。若きベン・イエフダーは自分の夢と信念とに従って、エルサレムに行き、ヘブライ語の復活運動を開始する。しかし、この時、ユダヤ人同胞から猛烈な反対にみまわれるのであった。反対者たちの主張は、人間は手を組んで待ち、神が思う存分に事を成すに任せるべきである、人間が邪魔をするのは神を汚すことである、というものであった。また、聖なる言葉を日々の暮らしに使うというのは、考えてみるだけでも神を汚すことだというのである。

ベン・イエフダーが父親になった時、自分の赤ん坊には聖書の言葉(ヘブライ語)だけで話しかけ、ヘブライ語以外の言語を一切聞かせてはならないと妻に命じた。彼はヘブライ語教師として働き、また唯一のヘブライ語新聞の編集発行人となり、さらには、ヘブライ語復活のために必要な最初のヘブライ語辞書編纂のために、その後の人生すべてをかけていった。実際、これは半世紀にわたる仕事になった。しかし、彼のヘブライ語に対する愛は衰えなかった。

この頃、「ドレフュス事件」<sup>24</sup>が起こり、諸外国に同化することによって、ユダヤ人は生き延びるべきだと言う主張は下火になる。1896年、つまりベン・イエフダーがユダヤ人の祖国とヘ

23 ロバート・セントジョン(島野信宏訳)『不屈のユダヤ魂 ヘブライ語の父ベン・イエフダーの生涯』(ミルトス、1988年)

24 「ドレフュス事件(L'Affaire Dreyfus) フランス陸軍大尉アルフレッド・ドレフュスをめぐる冤罪事件。ドレフュスは、1894年にスパイとして有罪判決を受けたが、再審の是非をめぐってフランスの世論は二分され、最終的には無罪となった。事件を複雑にしたのは、19世紀末の反ユダヤ主義的風潮だった。ドレフュスがユダヤ系フランス人だったため、反ユダヤ主義団体や国粋主義団体は、陸軍機密の漏洩(ろうえい)事件を反ユダヤ・キャンペーンに利用した。一部のユダヤ系フランス人はドレフュス救援の活動をおこなったが、その主張は世論をうごかすにいたらなかった。」(マイクロソフト エンカルタ百科事典2000)



ブライ語の復活についての最初の訴えを出してから17年後に、ハンガリー人ジャーナリスト兼劇作家テオドル・ヘルツェル (Theodor Herzl) の『デア・ユードンスタート (ユダヤ人国家)』という本が出版され、シオニズム運動が始まる。父祖たちの土地にユダヤ人国家を建設することを訴えたものである。

しかし、その後、パレスチナではなく、ウガンダに英国からユダヤ人国家建設の提案がなされたこともあった。1903年、英国の植民相ジョゼフ・チェンバレンが、英国領東アフリカのグアス・ギシュまたはウアシン・ギシュ平原の中の一萬五千平方キロの土地をユダヤ人に譲渡し、英国の保護下にユダヤ人国家を建設する。この土地全部がウガンダの中にあつたわけではないが、この計画は「ウガンダ計画」と呼ばれた。このウガンダ計画に対して、賛否両論が巻き起こり、指導者争いとなつたために、1904年4月ヘルツェルはウィーンでシオニスト行動委員会を招集して、ウガンダ計画の取り止めを決定した。「もしウシシュキンとその支持者たちがヘルツェルと争わず、アフリカの奥地ウガンダがユダヤ人の土地になっていたら、ユダヤ人の歴史は、あるいは世界の歴史はどのように変わっていたか、多くの人がそれ以来さまざまな考えを巡らせてきた」<sup>25</sup>。

ベン・イエフダーのヘブライ語復活運動についても、支持者と反対者がいたが、彼はくじけなかった。学問と教養のあるアラブ人友人たちも、「ヘブライ語の復活には賛成です。我々の言葉によく似ているからです。忘れてならないのは、アラブ人とユダヤ人の父は同じだということです」と言って、彼のヘブライ語辞書編纂に協力してくれた。ベン・イエフダーが壁にとめていた標語は、「時は短く、成すべき事はあまりに大きい!」であった。

言葉を復活させるだけではなく、語彙を増やさなければならなかった。ヘブライ語が、話し言葉でなくなった時、語彙の増加もなくなっていた。つまり、この二千年間に進化し、創造され、発明された、物や概念に当たるヘブライ語はないということだった。このような時、姉妹語にあたり、ヘブライ語に接ぎ木していく。同じセム系言語のアラビア語からは必要な言葉をたくさん借りた。新造語は新聞紙上で紹介した。新しく作っても、それが民衆に受け入れられ、使われるかどうかは民衆に任された。その時、シオニストのテオドル・ヘルツェルでさえ、ヘブライ語が国語になるとは考えていなかったという。家庭でのヘブライ語使用から始めて、学校教育の言語として、またシオニストたちの開拓村で、また新聞を通して、ヘブライ語推進運動を大きく展開していった。1921年にパレスチナが英国委任統治領になった時、ヘブライ語と英語とアラビア語が公用語であったが、1948年のイスラエル独立時には、ヘブライ語が国語として定着した。事実、「聖なる言葉」が世俗の言葉となり、日常的に使用されることに反対する宗教人たちとの葛藤や軋轢を超えての「言語の復活」であった。奇跡の国家イスラエル、奇跡の言語ヘブライ語と言われる所以である。

彼の死後、ベン・イエフダーのヘブライ語大辞典は、残された原稿と資料から、妻ヘムダと子どもたちが委員会を組織して発行し続け、イスラエル国が建国されると、この辞書の完成は国家事業となり、全16巻をもって完成した。

日本語の中で外来語として使われているヘブライ語は、香草のアロエ、シナモン、ヒソップなどである。また、宝石のサファイヤ、ジャスパー。教会用語であるハレルヤとアーメン。自慰を意味するオナニーは創世記38章に登場する人物オナンに由来し、リュックサックやナップ

25 ロバート・セントジョン『不屈のユダヤ魂』(ミルトス、1988年) 340頁。

サックはエジプトに食料を買いに行ったヤコブの子どもたちが担いでいた袋（サック）に由来している（創世記42章）。ガーゼはパレスチナ人自治区のガザに由来し、最近使われ始めた長期休暇サバティカルも安息日のシャバットから来ている。

## 12. 知恵と笑いとジョーク

創世記には、腹をすかせた兄エサウから、スープ一杯で長子の権利を譲ってもらう賢い弟ヤコブの話がある。このヤコブは、後に神からイスラエルという名をもらい、イスラエルの父祖となる。

人生とは旅、さすらいである。さすらいであるからこそ、各人の知恵、アイデアこそが常に実生活の資本となる。人は裸で生まれ、裸で死んでいくが、そのことを身をもって体験してきたのが、国を持たず、統治者の意向次第で財産を没収され、辛酸をなめてきたディアスポラのユダヤ人たちであった。

「知恵」は天地創造の要因とされ、箴言8章では擬人化されている。イスラエル人は「主を畏れることは知恵の初め」（詩編111:10、箴言1:7）と説いた。知恵は努力によって得られるし、賢人である年配者から伝達されることもあるが、まずは神から授けられる賜物と考えている（箴言2:6）。その良い例が、ソロモン王である。ある夜、神がソロモンの夢枕に立ち、「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と言われた。ソロモンは知恵を求め、神はそれを良しとされ、知恵の他に富や栄光、長寿まで彼に与えたというのは有名な話である（列王記上3章）。

ユダヤ人が集まると、必ずジョークの交換が行われる。最近はEメールでジョークのやり取りが行われていて、面白いジョークがあると、転送し合っていて楽しんでいる。どんな嫌な事があっても、くよくよせずに、ジョークで励ましたり、慰め合ったりするのがユダヤ人の良いところである。

ヘブライ語でジョークにあたる言葉は「ホフマ」というが、この言葉には同時に「智恵」や「英知」の意味も含まれている。ジョークはとても教育的だと考えられている。なぜなら、ジョークは創造力と機知、頭脳の回転の早さを要求するものだからである。また、人生を生きていく上でも、物事を多方面から見ることができる新しい発想法を身に付けることができる。

アインシュタインは、学校のきまじめな教育が嫌いであったという。彼は、後にこう述懐している。「私にとって最大の学校は、ジョークであった。世間が信じているルールだけをうのみにはしてはならない。というのは、そのルールにしばられていては、そのルールをくつがえす新しいものを生み出すことはできない」<sup>26</sup> から。

聖書においても、人間の笑いは肯定的に捉えられている<sup>27</sup>。

「わたしたちの口に笑いが、舌に喜びの歌が満ちるであろう。」（詩編126:2）

26 ラビ・M・トケイヤー（加瀬英明訳）『ユダヤ・ジョーク集』（講談社、1994年、1997年）43頁。

27 「（神は）なお、あなたの口に笑いを満ちし、あなたの唇に喜びの叫びを与えてくださる。」（ヨブ記8:21）「サラは言った。『神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い（イサク）を共にしてくれるでしょう。』」（創世記21:6）その他、「都の広場はわらべとおとめに溢れ、彼らは広場で笑いさざめく。」（ゼカリヤ書8:5）、「恐れを笑い、ひるむことなく」（ヨブ記39:22）など。

たとえば、こんなジョークはどうだろう。

カトリックの神父と、ユダヤ教のラビが道でばったり出会った。まず、カトリックの神父が言った。

「いったいあなたたちユダヤ人は、いつになったらあのバカらしい食事の戒律をやめるのですかね。あなたたちはエビを食べない。あんなおいしいエビを。カキは今シーズンだというのに、カキも食べない。」

ここで神父はツバを飲み込んだ。

「それから、あの脂（あぶら）がのったおいしいブタも食べない。こんなバカらしいことはやめたほうがいいんじゃないですか！ いつになったら貝や、エビや、ブタを食べはじめるといいますか？」

「それは簡単なことですよ。あなたの結婚式の日、盛大に食べてあげますよ。」<sup>28</sup>

ユダヤ・ジョークの面白さを味わっていただけたであろうか。

ユダヤ人のジョークには、シュレミールやヘルムという言葉がよく出てくる。シュレミールはまじめだがドジでまぬけな男、シュノーラは乞食、ヘルムはバカばかりが住んでいる町、というふうに、自らを道化と化し、鎧かぶとを脱ぎ捨てて、自分たち自身のことさえ笑いの対象にする。そんな心のゆとりと勇氣、自由と柔軟性を、ユダヤ・ジョークの中に発見することができるのである。

### 13. 「シャバット」 安息日

「シャバット」(Shabbat 安息日)は、イスラエルの生活習慣の基盤となるものである。神の天地創造の一日目は、「神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である」と、創世記1章4 - 5節に記述されている。さらに、「夕べがあり、朝があった。第二の日である」と続いていく。一日が朝始まり、夜に終わるのではなく、聖書では夕方に始まり、次の日の夕方に終わるのである。すなわち、日没が基準になっている。神が7日目に休まれたように、十戒の中で、人間も安息することが命じられている(出エジプト記20:10)。その理由は、「それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである」(出エジプト記23:12)。

そこで、シャバットは金曜日の日没に始まり、土曜日の日没に終わるが、ユダヤ人はこの間を家庭で過ごし、仕事を一切しないことになっている。神に祈り、また教養のために、一日を過ごす。この間、バスもストップし、商店やレストランの多くも休みになる<sup>29</sup>。仕事が禁じられているので、家事(料理もシャバットの始まる前までに作っておく)も、運転も、電気をつけてもいいけない。エルサレムの一角にあるメア・シェリームには、昔からユダヤ教超正統派が

28 ラビ・M・トケイヤー『ユダヤ・ジョーク集』87-88頁。

29 事業所や商店の多くは金曜の午後2時頃で営業をやめ、土曜は1日中休み。銀行は金曜の午前中だけ開けて、土曜は休む。レストランは金曜の午後2時から4時頃に閉まり、土曜の夕方6時頃から開店。バスは金曜午後3時頃から徐々に本数が減り、4時頃にはストップする。土曜日は午後3時頃から少しずつ動き出す。タクシーやホテルなどの観光施設はシャバットの間も開いている。

居住し、安息日に近くを車で通ろうものなら、投石されるという。

安息日ごとに行なわれる公の礼拝の中心は、トーラー（モーセ五書）<sup>30</sup>の朗読である。これは、毎週1区分ずつ朗読して、1年間で読了するように54区分（パラシャー）に分けられている。そこで、どこにいようと、イスラエルにいても、ニューヨークにいても、東京にいても、世界中のユダヤ人たちがみな同じ聖書の箇所を読むことになる。ユダヤ人を宗教共同体として結束させているのが聖書であることがよく分かる。

安息は人間や家畜だけではなく、土地にも必要である。「七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。」（レビ記25:4）

これは現代でも守られている。イスラエルの新聞を読むと面白い。

「シュミタとは旧約聖書レビ記25章にある7年ごとに土地を安息させる年。ユダヤ暦は9～10月から新年が始まるが、次の5761年はそれに当たる。実際に耕作を休むと食糧難になるため、今世紀初めからは1年間だけ非ユダヤ人に形式的に土地を売るなどの便法が使われている。」<sup>31</sup>

「9月29日夜から始まる安息年（シュミタ）では、ハラハーにより土地に新たな植物を植える事が禁じられるため、国会議事堂の花壇の管理対策を検討中。特殊なハイテク素材のシートを花壇の地下に埋設して花壇を土壌から完全に切り離し『鉢植え』と解釈する案が浮上する中、反宗教のシスイ党は『国費の無駄。石庭か造花庭園にすれば』と宗教政党の横暴を非難している。」<sup>32</sup>

聖書の言葉を必死に守ろうとするユダヤ人、そしてその国家。しかし、世俗化の波が押し寄せてきているのも事実で、現代社会を生きるには、戒律を違反しないでうまくぐり抜ける術をも開発しなければならない。「シャバット・エレベーター」<sup>33</sup>や「シャバット・フォン」<sup>34</sup>なども、そのような産物である。

#### 14. イスラエルの祝祭日

西暦はキリスト暦だが、ユダヤ教では太陰暦のユダヤ暦を使っている。そこで、西暦2000年はユダヤ暦では5761年となる。イスラエルの祝祭日もその殆どが聖書の記述に則っている。レビ記23章で、神がモーセに伝えた「イスラエルの人々を聖なる集会に召集すべき主の祝日」は、安息日、過越祭、初穂祭、七週祭（五旬節）、ラッパの祭（新年祭）、大贖罪日、仮庵祭の七つである。

太陰暦のゆえに祭日の日付は年により変動する。そこで、概観を知る上で分かりやすいよう

30 旧約聖書の最初から五つの書物、「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」、「民数記」、「申命記」のことである。この五冊をなめし皮に手書きして、一巻の巨大な巻物にしたものを、トーラーと呼ぶ。

31 インターネットによる通信「シオンとの架け橋・イスラエルニュース」から。

32 『エルサレム・ポスト』（2000年8月13日付）による。

33 多くのホテルでは、シャバットに入るとエレベーターは「自動各階停まり」に切り替えられるため、行き先階のボタンを押すという労働をせずにする。

34 プッシュボタンを押さなくても、音声認識でかけられる電話のこと。

に、西暦2000年の日付を添えてみる。

- (1) 「安息日」  
 (2) 「ペサハ」(Pessah) 過越の祭 (4月20日～26日)

「第一の月の十四日の夕暮れが主の過越である。」(レビ記23:5)

「同じ月の十五日は主の除酵祭である。あなたたちは七日の間、酵母を入れないパンを食べる。……」(レビ記23:6-8)

イスラエルの民がモーセに率いられて出エジプトしたことを記念する祭である。この期間中、イースト菌の入ったパンは禁止され、マツァを食べる。「エジプト人は、民をせきたてて、急いで国から去らせようとした。……民は、まだ酵母の入っていないパンの練り粉をこね鉢ごと外套に包み、肩に担いだ。」(出エジプト記12:33-34)

ペサハの前夜は家族一同が集まり、セデルという晩餐を持ち、出エジプトを偲ぶ食品を食べる。その前に、祭の由来を記したハガダーを読む。簡単な内容なので、読んでいるうちに自然に覚えてしまう。「エジプトを出なかったら、どうなるか」など、どれもユダヤ教の基本を教える内容である。食事の後には宝探しがあり、子どもも最後まで付き合って忍耐を覚える。(初日と最終日は休日)

- (3) 「シャブオット」(Shavuot) 「十戒」授受を祝う祭、七週の祭、ペンテコステ(6月9日)

「七週間を経た翌日まで、五十日を数えたならば、主に新穀の献げ物をささげる。」  
 (レビ記23:16)

モーセはシナイ山で十戒を授かる。十戒はユダヤ教の土台である。ペサハの七週間後、つまり49の翌日の50日目。キリスト教徒はこれを「ペンテコステ、五旬節」と呼んでいる。ユダヤの慣習では、シャブオットの前夜は徹夜で勉強する。仲間が集まって、聖書だ、タルムードだと言って、ユダヤの聖典を紐解く。それはモーセが十戒を授けられた時、先祖たちは眠ってしまったので、その失敗を償う意味からである。(休日)

- (4) 「ローシュ・ハシャナー」(Rosh Hashanah) 新年 (9月30日～10月1日)、ラッパの祭

「第七の月の一日は安息の日として守り、角笛を吹き鳴らして記念し、聖なる集会の日としなさい。」(レビ記23:24)

西暦の9月または10月にあたるティシュレ月 (Tishrei) の始まりは、ユダヤ教の新年である。

ユダヤの新年の特徴は、角笛 (ショーファー、雄羊の角) の音である。「ローシュ・ハシャナー」の別名を、「ハッグ・ハテルアー」(角笛の音の祭) と呼ぶくらいである。角笛には吹き方が決められていて、一拍子、三拍子、九拍子の三通りである。日本では大晦日の晩、除夜の



鐘を百八回ついて煩惱を追い払う。ユダヤ人は、角笛を合計百回吹いて、神に立ち帰る決心をするという。新年カード(ルシャナトバ・カード)の交換もする。

(5) 「ヨム・キプール」(Yom Kippur) 大贖罪日(10月9日)

「第七の月の十日は贖罪日である。聖なる集会を開きなさい。あなたたちは苦行をし、燃やして主にささげる献げ物を携えなさい。この日にはいかなる仕事もしてはならない。この日は贖罪日であり、あなたたちの神、主の御前においてあなたたちのために罪の贖いの儀式を行う日である。……」(レビ記23:27-32)

ティシュレ月の十日目にくる「ヨム・キプール」(大贖罪日)は、ユダヤ教で最も神聖な日とされている。引用句の「苦行」とは断食のことで、皆が断食をするが、断食では水さえ飲んではいけない。この日は和解の日とされ、罪を告白し、神に赦しを求める。ローシュ・ハシャナーからヨム・キプールまでの10日間は、前年1年間の罪を悔い改める祈りをする時である。ユダヤ教徒は家族や友人と共に、過ぎた年の過ちを正し、借金を清算する。空港も閉鎖、全ての施設が休みになる。

1973年の第四次中東戦争は、ヨム・キプールの日に始まった。イスラエル国民は一人残らず不意を突かれた。この戦争は、イスラエルにとって大敗で始まったが、終わりにはシリア軍とエジプト軍をほぼダマスカスとカイロまで押し戻した。

2000年は、大贖罪日の断食は日曜の日没から始まった。普段なら、テレビも放送を停止するのだが、パレスチナとの戦争勃発に備え、国営テレビ放送はテレビのスイッチを切らないで断食に入るようにと国民に呼びかけた。(ヨム・キプール中にスイッチを入れることは労働になるが、それ以前につけたものをつけっぱなしにしておくことは許される。)「スノーノイズが出ている間は何事ありません。緊急事態が発生すれば即座に放送を再開します」とのアナウンスがあったそうである。

(6) 「スコット」(Succot) 仮庵の祭(10月14日~20日)

「第七の月の十五日から主のために七日間の仮庵祭が始まる。……」(レビ記23:34-43)

イスラエルの民が出エジプト後8日間仮庵住まいだったことを偲び、草葺き屋根の簡易小屋を建てて、そこで暮らす。中に4種類の植物を飾り、友人を招いて食事や勉強などをする楽しい祭である。秋の収穫を祝う意味もある。この祭については、預言者ゼカリヤが、終わりの日に異邦人も祝うようになると預言している。

「エルサレムを攻めたあらゆる国から、残りの者が皆、年ごとに上って来て、万軍の主なる王を礼拝し、仮庵祭を祝う。」(ゼカリヤ書14:16)

(7) 「シムハット・トーラー」 律法の歡喜祭(10月21日)

シムハット・トーラーの祭も前日の夕方から始まる。夕方の礼拝で、祈りが終わると、皆でトーラーをかついでシナゴークの会堂内をダンスする。踊り、歌い、喜びながら列を組み、シ

ナゴグを七周すると、トーラーの終わりの部分、申命記最後の33～34章を学ぶ。翌朝の礼拝で、再度同じ箇所を読み、これをもって一年かかった（54回）トーラーの読了を祝う。

この祭では、二人の「花婿」がトーラーの読み手に選ばれる。「律法の花婿」は、トーラーの最後の書である申命記を読み、「創世記の花婿」は創世記から読み始める。「花婿」に選ばれるのはたいへんな名誉とされる。神の言葉が行いとして生活習慣に密着し、絶え間なくこの伝統は継続、継承されていく。これによりユダヤ人たちは永遠に生きる、聖書の民になるのである。

・「ハヌカ」(Hanukkah) 宮潔めの祭 (12月22日～29日)、灯明祭

紀元前164年ギリシャの異教徒によって汚された神殿を、ユダ・マカビーが潔めた故事に由来する。9本枝の燭台(メノラーの一種)のロウソクに(中央の1本は他のロウソクに火を灯すためのもの)、毎日一本ずつ火を灯していく8日間の祭。燃えるロウソクの前で歌を歌ったり、ゲームで遊んだり、贈り物を交換したりする。(休日ではない)

・「プリム」 仮装行列祭 (2001年3月9日～10日)

旧約聖書のエステル記にあるように、ペルシャ帝国内のユダヤ民族を絶滅させようと企むヘマンの陰謀から、王妃エステルがユダヤ民族を救った事件を記念する祭。このプリムの日には、ユダヤ人は学校やシナゴグで素人芝居のコメディを上演したり、仮装パーティやパントマイム、カーニバルをもって祝う。この祭では、必ずヘマンというクッキーが出るが、敵を笑い、精神的に食ってしまうことで、ユダヤ人は勝利を祝う。

レビ記23章21節に、「これはあなたたちがどこに住もうとも、代々にわたって守るべき不変の定めである」とある。実際、ユダヤ人たちはどこに離散しようとも、安息日と祝祭を守ってきた。ユダヤ教とは、生活に密着したものである。現在、世俗化が進む一方で、宗教回帰もまた起きてきており、人口の98%は聖俗共存を望んでいるらしいが、イスラエルのユダヤ人はほぼ全員息子には割礼を施し、大多数の人々が「ヨム・キプール」(大贖罪日)の断食を守っている。ユダヤ教に無関心な人でも祝祭は守っている。世俗の代表と言われるキブツでも、ユダヤの伝統はかなり守られているという。

旧約聖書と新約聖書の連続性という観点から、ユダヤ人であったイエス・キリストの生涯は、このイスラエルの祝祭抜きには語れない。仮庵の祭でイエスは生まれ、過越の祭で十字架につけられるために引き渡され(マタイ26:2)、十字架上で流された血潮は、鴨居(横木)と柱(縦木)に塗った犠牲の小羊の血となった。初穂の祭とイエスの復活は呼応し、「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました」(1コリント15:20)。七週の祭(ペンテコステ)で聖霊が下り、教会が生まれた。ラッパ(ショーファー)を吹き鳴らす祭は、仮庵の祭の前にあり、ユダヤの風習では新年を告げる。2000年前、それはイエスが人となって来られる前触れを知らせたが、同様に、ラッパの音は終末時のイエス再臨のしるしと預言されている(マタイ24:30-31)。

その他、聖書に記載のないイスラエルの祝祭には、以下のものがある。

・「トゥ・ビシュバット」[植樹祭] 休日ではないが、新生国家にとっては砂漠を緑に変

える重要な日

- ・「ヨームハシヨア」[ホロコースト記念日]（5月3日） 全国にサイレンが鳴り響く中、車も停止して、ホロコーストで虐殺された数百万の人々を追悼して2分間の黙祷を捧げる。
- ・「ヨームジカロン」[戦没者記念日]（過越祭の20日後） 祖国に生命を捧げた兵士たちと、爆撃やテロの犠牲となった市民を追悼する。
- ・「ヨームアツマウト」[独立記念日]（5月10日） 1948年の建国を祝って、国中の人たちが独立の苦勞と喜びを分かち合う日
- ・「ラグ・バ・オメル」（5月23日） パルコフがローマ兵に勝利を治めた日で、子どもたちがたいまつをたいて祝う日（学校のみ休み）
- ・「ティシャー・ベアウ」（8月10日） エルサレムの神殿崩壊を嘆き、嘆きの壁の前で祈りを捧げ、9日間の断食をする（休日ではない）

ユダヤ人は「記憶の民」とも言われているが、矢部正秋は『ユダヤ式交渉術』の中で、「過去の失敗に学ぶという点で、ユダヤ人にならぶ者はない。日本人にとって祭はめでたい日であり、ドンチャン騒ぎをして日頃の憂さをはらす日だが、ユダヤ人にとっては民族の過去の苦難と失敗を記憶し学ぶ時なのである」<sup>35</sup>と述べている。確かに、過去の苦難と失敗から新しい知恵を学び取り、それを次の飛躍のためのジャンプ台にしてきた民族と言える。

## 15. 土地と動植物の回復

前8世紀の預言者イザヤは、「主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰め、荒れ野をエデンの園とし、荒れ地を主の園とされる」（51:3）と預言したが、それが今、実現されようとしている。

イスラエルの地から多くのユダヤの民が追放され、他の者がその地を継いだ時、彼らは土地に心を配らなかつた。1860年代にアメリカの作家マーク・トウェインが、当時オスマントルコ帝国領であったパレスチナを旅行してこう書き残している 辺り一面どこもかしこも荒涼としていて、1フィートの影もなかつた。彼はその土地を、ぶつぶつした、木のない裸の地と呼んでいる。ガリラヤについても、露も無ければ、花も無く、鳥も木も存在しない。一つの平地と木陰のない湖があり、その先には禿山が幾つもある。

実際、諸外国からユダヤ人たちが帰還をし始めた時、この土地は不毛で、居住者も殆どいなかったという。しかし、ユダヤ人の精神の奥底には、預言者たちの土地の回復預言があった。旧約聖書の思想においては、神の祝福というのは民と土地の双方に対してであり、また呪いも民と土地の両方に対してである。

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ  
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ  
野ばらの花を一面に咲かせよ。……  
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。（イザヤ書35:1-2）

35 矢部正秋『ユダヤ式交渉術』（三笠書房、1990年、1998年）224頁。

しかし、お前たちイスラエルの山々よ、お前たちは枝を出し、わが民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが戻って来るのは間近である。わたしはお前たちのために、お前たちのもとへと向かう。お前たちは耕され、種を蒔かれる。わたしはお前たちの上に、イスラエル全家の人口をことごとく増やす。町々には人が住むようになり、廃墟は建て直される。わたしはお前たちの上に人と家畜を増やす。彼らは子を産んで増える。わたしはお前たちを昔のように人の住むところとし、初めのときよりも更に栄えさせる。そのとき、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。(エゼキエル書 36:8-11)

この言葉に励まされてか、イスラエル人たちは不毛な荒地を豊かな土地に作り変えてきた。この「約束の地」に対する愛情と労働は、現在、技術的にはハイテク農業によって支えられている。

2500万本以上の木が植えられ、さらに何百万本の木が実生している。石畑が沃地となり、マリアで満ちていた沼地は乾燥し、植樹され、古代の町々が建て直され、都市も再建されている。聖書預言の通りに、バラの花の咲き誇る国となった。ヨルダン渓谷やネゲブの荒地では、農夫たちが一日5百万本もの花を生産し、輸出している。1998年には15億本の花を輸出したという。花だけではなく、果物や野菜が荒地で栽培されている。メロン、きゅうり、トマトといった野菜が、地下塩水で育てられている。りんごや梨の特別品種が、暑く乾燥した気候でも育つように改良され、イスラエルでは同じ畑にりんごとオレンジが育つ。昨年は、15万トンの果物や野菜を輸出することができた。肥沃なナイルデルタを誇る大国エジプトの2倍、約3千種の植物が生育している。

淡水や塩水の池では、世界でも類を見ない様々な種類の魚が養殖されている。

キブツで若い男女が一生懸命に働いているためか、イスラエルの市場には野菜や果物、畜産物が溢れていて安価である。オレンジは1キロ100円、豆1キロ210円、薫製のサバ1匹150円など。東京で出会ったユダヤ人カップルが、日本ではトマト1個が100円だが、イスラエルでは1キロ(10個位で)100円だと話していた。食糧品には、政府の支援があるそうである。

動物にしても、460種類もの鳥や、アフリカ猿、シベリア狼のような遠い国の動物を見ることができる。イスラエルから長い間姿を消していた、聖書に登場する動物を再現するプログラムさえ企画されている。イスラエルの南端のエイラットから北に35kmの所にあるハイバル動物園には、旧約聖書に登場する動物が集められている。ガゼル、ダチョウ、ロバ、野ヤギ、ヒョウ、オオカミ、ウサギ、ハイエナなどがあり、動物園の中は一周8km、屋根のある車でのみ見て周ることができる。

預言通りに、エデンの園の復活が進行中のようなのである。「そのとき人々は、『荒地果てていたこの土地がエデンの園のようになった。荒地果て破壊されて廃墟となった町々が、城壁のある人の住む町になった』と言う」。(エゼキエル書36:35)

## 16. 日本との関連

映画の世界では、ハリウッドを代表するヒットメーカーで、ユダヤ人であるスティーブン・

スピルバーグ監督 (Steven Spielberg, 1947 - ) の『シンドラーのリスト』(1993) が、世界中の人々に感銘を与えたことは記憶に新しい。シンドラー (1908 - 74) は、1200人のユダヤ人の命を救った。しかし、リトアニアで領事代理をしていた杉原千畝 (1900 - 86) は、日本の通過ビザを2139件発給して (一件の査証を家族全体で利用することができた)、約6000人の命が救われたという。

2000年は杉原千畝の生誕100年にあたり、彼の郷里である岐阜県八百津町の人道丘公園では7月30日に杉原千畝生誕百年祭が挙行され、同時に杉原千畝記念館の開館式が行われた。杉原は早稲田大学の大学生の時に、早稲田奉仕園 (キリスト教系) の集会に出席したこともあるという。5月からアメリカのホロコースト記念館 (the U.S. Holocaust Memorial Museum) にて、今後2年間にわたる杉原千畝の展覧会が開始された<sup>36</sup>。日本各地でも10年前から、「心に刻むアウシュヴィッツ展」が開催されているが、すでに延べ90万人が入場している。この巡回展を常時展にするため、栃木県の住宅会社ナスハウス社長原田時近<sup>37</sup> が土地の協力を申し出、塩谷町 (JR矢板駅) にミュージアムが開館したそうである。

杉原千畝の他にも、ユダヤ人を助けた日本人がまだいる<sup>38</sup>。

河村愛三大佐は、大戦中、2万人とも言われるユダヤ人がシベリア鉄道で満州に渡ろうとする厳寒の中、立ち往生している所を、凍死するか餓死寸前の彼らを見て、特別列車を出し、ユダヤ人をハルピンまで輸送した。1937年8月から1938年7月、ハルピンの特務機関長だった樋口季一郎 (1888-1970) は、ユダヤ人難民の満州入国を許可した。柴田貢上海領事は、ドイツS.のメイシンガー (Meisinger) を中心とした、ユダヤ人大量暗殺計画を事前に知らせて、ユダヤ人救済に貢献した。アブラハム・小辻教授はセム語と旧約聖書の学者であったが、1939年に松岡洋右の要請でプレーンとして満鉄に就任、第二次世界大戦が始まった頃帰国した。彼は杉原千畝のビザ発行により神戸に避難してきたユダヤ人たちを助けた中心人物の一人とされている。熱心なキリスト者であったが、1959年にユダヤ教に改宗し、エルサレムで割礼を受け、アブラハムの名前を授かった。

1942年、第二次世界大戦初期の中国上海<sup>39</sup> で、日本陸軍の憲兵隊長の久保田つとむはナチス・ドイツの将校から、中国にいるユダヤ人約5万人の殲滅計画を聞かされる。長崎に育ったユダヤ人アブラハム・コーン博士の助言を受け、久保田はそれを拒否し、ユダヤ人虐殺は実行されなかった。日本軍はユダヤ人を殺すのではなく、保護したのである。

ユダヤ人難民が神戸に来た時、そのリーダーは東京に呼ばれ、海軍艦政本部で事情聴取されたが、提督らはユダヤ人たちがナチにより不当に迫害されていることを理解、それにより彼らは日本から無事、上海やアメリカに向かうことができた。その間、神戸や横浜ではユダヤ人たちを暖かく迎え入れた多くの人たち (主に中田重治率いるホーリネス教会の信者たち) がいた。

つまり、日独伊三国同盟が成立していたにも関わらず、日本政府当局の対ユダヤ人政策はドイツに同調するものではなかった。1938年の「ユダヤ人対策要綱」は、「全面的にユダヤ人を

36 The Daily Yomiuri (May 4, 2000)

37 キリスト者であり、ワイズの会員。

38 『サビオ』(小学館、2000年3月8日発売号)

39 実際、上海の受け入れたユダヤ人数は2万5千人を超え、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカに逃げたユダヤ人総数よりも多い。

40 沼野充義編『ユダヤ学のすべて』(新書館、1999年) 231頁。



排斥するなどというのは八紘一宇の国是に沿わない」として、他の一般外国人と等しく取り扱う事を決めている<sup>40</sup>。

その他、過去に遡って、記録に残っているところでは、ペリー来航以前の鎖国時代（19世紀）の沖縄に、ベルナルド・ジャン・ベテルハイムというユダヤ人が来ている。那覇にある、彼の記念碑には、ダビデの星が彫られ、彼の名と共に、彼がキリスト教宣教師（ユダヤ教の神学校で学んだ後）、医者、ユダヤ人、沖縄に住んだ最初の外国人であったことなどが記されているという。また、ポルトガルから長崎に来たキリスト教宣教師、また医者であったアルメイダという人物もユダヤ人であった。日本にユダヤ人が住むようになったのは、1860年頃からで、それもごく少数であった。大方のユダヤ人は、ユダヤ人としてではなく、イギリス人、アメリカ人、シリア人、ペルー人などそれぞれの出身国者としてであった。

最も有名なのは、ニューヨークの投資商会クーン・ローブに属していた金融家ジェイコブ・シフ（ヤコブ・シッフ）が、日露戦争（1904 - 5年）に必要な日本政府の公債を引き受けてくれたことである。彼は帝政ロシアがユダヤ人を迫害していたのに憤っていたのである。日本はシフに対する恩義を忘れず、第二次世界大戦下に日本の管理下にあったユダヤ人難民に対するナチの圧力をはね付けたのである。

内村鑑三（1861-1930）は、ユダヤ人の国家再建をキリスト再臨の近いしるしと見なし、「千二百万のユダヤ人は、われらのために立てられる福音の証明者である。彼らに関する預言成就の事実を見て、われらはまたわれらに関する預言の必ず成就すべきを信じ得るのである」<sup>41</sup>と書いている。彼は、ヘブライ大学がエルサレムに創立されたことにも特別の意味を見出して大喜びしたと言われている。

中田重治（1870-1939）は、「日本民族が主の再臨に関係のある民であること、ことにこれに伴うユダヤ民族の回復に親密な関係のあることを見出した」と書いて、日本民族の救済はユダヤ民族の救済と分かちがたく結びついていることを公表した。すなわち、彼のホーリネス教会は日本国全体を代表して、第一の使命をユダヤ人のために祈ることとし、ユダヤ人組織に献金をし、ユダヤ人の福祉のために奉仕した。それは、大艱難の時代に、「その祈りのゆえに神は怒る時にもあわれみを忘れたまわず、その艱難の日にわが国民の上に特別のあわれみを注ぎたもうことを信じる」<sup>42</sup>からであった。

前述したジェイコブ・シフの日露戦争時の金融援助を始め、日本の対外通商の相手国商人がユダヤ人であることはしばしばであった。日本在住のユダヤ人貿易商も、近東やアフリカ方面などの市場を開拓して、日本商品の海外進出に貢献してきたと言われている。最近のイスラエルと日本の貿易事情としては、1991年の湾岸戦争と前後してアラブボイコットが解除され、それまでスバル、ダイハツが主流だったイスラエルの日本車事情は一変する。三菱、トヨタ、ホンダ、マツダと、イスラエルの道路に今まで見なかった日本車が溢れるようになった。テルアビブのホテルの中に、日本レストランが開店し、在イスラエル日本人人口も微増し始めている。

1999年10月に経団連ミッションがイスラエルを訪問している。イスラエルの対日輸出額は、1999年前期が3億7200万ドル。輸出品目はダイヤモンド、電気機器、化学製品が中心。日本が

41 「エルサレム大学の設置」（『聖書之研究』1918年9月号。『内村鑑三全集 第24巻』、岩波書店、1982年、315-316頁）。

42 中田重治『聖書より見たる日本』（『中田重治全集 第2巻』、いのちのことば社、1973年、130頁）。

らの輸入額は、約10億ドルに達し、主に自動車、電気製品、光学機器、プラスチックなどである。

衣食住のうち、服装と食事については前述した。住については、住民の大多数が都会のアパートや一戸建て住宅に住むが、7 - 8%はキブツかモシャブに暮らしている。キブツでは、土地、仕事（農業か工業）、食物、設備を全員で共有する。モシャブは100世帯未満の小さい農村で、農民は個々に仕事をするが、生産物は共同で出荷している。

ユダヤ人にとって、宗教は生活である。お金に関しては、よく引き合いに出される『ベニスの商人』は全くの誤解である。彼らはお金を軽蔑するのではなく、むしろ人生に役立つものだと考えている。タルムードには、映画『シンドラーのリスト』の名言、「一人の生命を救うことは、全人類の生命を救うことである」の言葉も含まれている。タルムードは、まず自分を愛することを教える。自分を愛せる人間が、他人をも愛することができるからである。その教えはバランス感覚に満ち、東洋の中庸の精神にも類似している。「客と魚は三日もすると悪臭がする」というユダヤの格言も、何事につけほどほどが良いことを教えている。

日本人とユダヤ人の類似点については 。ユダヤ教では、日本の神道と同じように、子どもが生まれると、一ヶ月目にシナゴークに連れて行って祝福を受けさせる。頼りになる父親とやさしい母親というのが、ユダヤの男女の理想像である。しかし、家庭内では女性がかなりの力を持つ。それは、聖書のサラを見ても分かることである。家庭の外で働く女性も多く、労働人口の40.3%（1997年）を女性が占める。結婚の縁組みには両親が深く関与し、披露宴の費用を払うのも両親である。親子の絆もきわめて強く、それは子どもが成人しても変わらない。子どもの将来に備えて最善を尽くすのは、両親にとって大きな責任である。子どもは結婚すると、両親または親戚の近所に住み、両親の老後の世話をすることが期待される。休日や祝い事がある日には、家族が集まる。ユダヤ人はお互いに家族であり、兄弟であるという意識が強い。昔から、異邦人社会にあって、ユダヤ人コミュニティを形成して、信仰生活とユダヤ人としての教育を守り、ユダヤ人同志助け合ってきたからである。困窮している人がいると、ユダヤ人社会がその人を養ってきた。それは旧約聖書に書いてある通りである。ユダヤ人は、保健衛生の観念を厳しく植え付けられている。その他、家族を大切にすること、特に目上の人を敬い、老人を大切にすること。神を敬い、学問を尊び、何事努力を惜しまず、向上心に満ち溢れていることなどを上げることができる。

相手との交渉術については、大声でまくしたてたり、机をゲンコツで叩いたり、書類を投げつけたり、交渉破棄の通知や訴訟提起、最後通告までする、ハード型交渉法がアメリカ式とすると、このような強硬手段に屈してしまいがちなのが日本人である。日本人は、長い間農耕民族であったために、口が重く、交渉が下手で、特に曖昧な言葉を使うのが特徴的である。口では簡単に「イエス」を言うが、行動では「ノー」であることが多い。内と外の使い分けや、ダブルスタンダード、例外を持ち出すこともよくある。会話が苦手で、話題に乏しく、サービス精神や社交性に欠け、仲間内だけに分かる内緒話に流れ易い。それに対して、ユダヤ式交渉術はソフト型だが一貫した哲学を持ち、相手のことを知るために徹底的に情報を収集し、綿密な準備と慎重な手続きを取り、相手の気持ちを重んじるという人間的配慮もあり、双方の主張の一致点を見出そうと努力する。感情に流されず、醒めた目と、良い雰囲気作りのためのジョークも忘れない。

人間関係における初対面のあり方について 。たとえば、日本人はフォーマルな形で初対面を果たそうとする。イスラエルの場合はその逆で、フォーマルにすることは形式的な感じを

与えるので、むしろ良いイメージを与えないと考える。そこで、にこにこして、冗談を言いながら、肩をたたいて、服装もインフォーマルで、フレンドリーにすることを好む。イスラエル社会は直接的な社会なので、すぐに友達になれるし、信頼もできる。ところが日本では、友達になるのにとっても時間がかかり、イスラエル人は日本人には時間が必要なことを理解しなければならない。イスラエル人は議論好きだが、ユーモアも持ち合わせている。日本人は直接的な批判をしない反面、その本心をつかむことが難しい。イスラエル人が持っている日本人のイメージは頭が良く、勤勉で親切。不思議なことに、アメリカにいる留学生や海外勤務の日本人は、WASPのアメリカ人よりもユダヤ人を友人に持つことが多い。

死海を囲む山々の中に標高400mのマサダ<sup>43</sup>がある。ユダヤ人の反乱で、紀元70年ローマ軍はエルサレム攻撃を開始し、4ヶ月後の9月26日に全市が陥落する。エルアザル・ベン・ヤイルに率いられた熱心党の967人は最後まで戦い続け、マサダに立てこもる。彼らは暑さと極度の乾燥の中で、なお民族の誇りを捨てなかった人たちである。抵抗は二年以上も続き、この要塞を取り囲んだローマ軍兵士は1万人とも言われている。異教徒に辱めを受けることを良しとしなかった抵抗者は、7人（女子供）を除いて全員が刺し違えて自決してしまう。現地のガイドによると、この自決の話に感動するのは、ユダヤ人と日本人だけだという。

音楽<sup>44</sup>については、迫害から逃れてきた音楽家たちが作った楽団が「イスラエル・フィル」<sup>45</sup>で、毎年、来日公演をしている。2000年2月27日には、浜松市の「アクトシティ浜松」でも公演をした。ユダヤ教の典礼歌は10世紀頃に楽譜が完成し、現在もこの唱法が守られている。イスラエルの音楽のメロディーは独特なものだが、世界の国歌の中で「レ」の音で始まって、「レ」の音で終わるのは、日本の「君が代」とイスラエルの「ハティクバ」の二つだけだそうである。

イスラエルの国営エルアル航空は、2000年10月から日本に向けて数便のチャーター便を運行し始め、2001年初頭には、日本とイスラエルを結ぶ定期直行便を運行する予定である。それは、両国の地理的距離を埋め、また同時に両国の関係と両民族の相互理解に多大な貢献をするであろう。

日本との交流の一つとして、1960年代から始まったキブツ研修で、日本の若者たちがイスラエルに行くようになった（日本キブツ協会）。すでに、一万人ほどの人たちがキブツ体験をしている。

日本とイスラエルを結ぶ諸団体には、「日本イスラエル商工会議所」<sup>46</sup>「(社団法人)日本・イスラエル親善協会」<sup>47</sup>、「日本・イスラエル文化研究会」などがある。1995年6月、福山に、ホロコーストで犠牲になった150万人の子どもたちに捧げられた「ホロコースト教育センター」が開館。開館以来、人権学習の場として国内外から4万人以上が来館している。また、1998年

43 アラム語で「要塞」の意味。紀元前100年頃に、大祭司ヨナタンが自然の地形を利用して、山頂に要塞を築いた所である。その後ヘロデ王が増改築し、巨大な貯水槽、食料庫、ローマ式浴場などを設け、豪華な冬の離宮兼要塞とした。

44 兵庫教育大学教授の水野信男氏による『ユダヤ音楽の旅』が発刊された。旧約聖書時代から現代までのユダヤ音楽の系譜を綴ったもので、シナゴークでの朗唱なども、添付のCDに収められている。

45 牛山剛 『イスラエル・フィル誕生物語』(ミルトス、2000年)

46 問合せ先 03-3239-7866

47 問合せ先 03-3400-8659 『月刊イスラエル』を発行している。

48 問合せ先 03-5363-4808

10月、東京都新宿区に「ホロコースト教育資料センター」<sup>49</sup>が開設された。

最近は、インターネットで様々な情報を得ることができるようになり、世界はますますボーダーレス化してきた。イスラエル政府観光局公認・協賛のイスラエル公式ページが、「<http://www.israel.co.jp>」である。また「ブリッジス・フォー・ピース日本支部局」<sup>49</sup>のホームページが、「[http://www.bfpj.net./](http://www.bfpj.net/)」である。イスラエルに関心をもつ日本人に、イスラエルの主要新聞である『エルサレム・ポスト』『ハアレツ』『イスラエルワイヤー』『アルツフ』からニュースを要約（日本語訳）し、電子メールで週2回配信しているのが、「シオンの架け橋」[「http://www.zion-jpn.or.jp」](http://www.zion-jpn.or.jp)である。

## 終わりに

筆者がユダヤに関心を持ったのは、大学生の時、ユダヤ系アメリカ文学に触れ、特にソール・ベロー文学の魅力に取り付かれて、それを卒業論文にしたことであった。その後は、他の作家・作品研究に携わりしばらく離れていたが、1999年、海外研修の折りにイスラエルに立ち寄ったことから、またユダヤ人とイスラエルに対する関心がよみがえってきた思いである。しかしながら、限られた紙数の中に詰め込むには内容が膨大で、言い足りないところが多々あったと重々承知している。今後も、ユダヤ研究を続けていきたいと願っている。カトリックとプロテスタントが血で血を洗っていたのが過去の出来事となった現代、今度はユダヤ教とキリスト教の対話と和解が望まれる。さらには、将来的に、ユダヤ教とイスラム教とキリスト教の対話と和解についても然りである。人間というものは自分の知らない、無知な事柄に対して、差別や偏見、恐れが生じてくるものである。異文化と交流し、相互理解をはかることで、世界の平和が追求されていくと信じるものである。日本においても、ユダヤ関連の書物や雑誌記事は多いが、実際にユダヤ人と付き合った経験から発したのではなく、むしろイデオロギー的なものや反ユダヤ主義に陥るものが少なくない。異文化交流を通してありのままのユダヤ人やイスラエル国家に接して、その実像に迫る研究が必要なのではなからうか。

## 参考文献

- 牛山 剛 『イスラエル・フィル誕生物語』（ミルトス、2000年）  
内村鑑三 『内村鑑三全集 第24巻』（岩波書店、1982年）  
大嶋 仁 『ユダヤ人の思考法』（筑摩書房、ちくま新書、1999年）  
グッドマン、デイヴィッド＋宮澤正典（藤本和子訳）『ユダヤ人陰謀節 日本の中の反ユダヤと親ユダヤ』（講談社、1999年）  
小石 豊 『古代ユダヤの大預言』（日本文芸社、1998年）

---

49 イスラエルでは約70万人が貧困線の下に生活している。その中には、20万5千家族、28万5千の子ども、10万人の高齢者が含まれ、その多くはホロコーストの生存者だそうである。「ブリッジス・フォー・ピース」は、世界のキリスト者からの寄付により、帰還民には「ウェルカム・キッチン・バスケット」を、貧困者や高齢者には「緊急食料配布」の食料提供を、また移民を希望する海外ユダヤ人のビザ取得を援助するプロジェクト、家屋修繕プロジェクト、植樹推進プロジェクト、平和の架け橋プロジェクトなどを積極的に行っている。

- 小岸 昭 『十字架とダビデの星 隠れユダヤ教徒の500年』(日本放送出版協会、NHKブックス、1999年)
- 佐藤唯行 『アメリカ・ユダヤ人の経済力』(PHP研究所、PHP新書、1999年)
- ザミラ、イスラエル(広瀬佳司訳) 『わが父アイザック・B・シンガー』(旺史社、1999年)
- サルトル、J - P 『ユダヤ人』(岩波書店、岩波新書、1956年、1995年)
- シンガー、アイザック・バシェヴィス(大崎ふみ子訳) 『ルブリンの魔術師』(吉夏社、2000年)
- スターン、ディビット(横山隆監訳) 『福音とユダヤ性の回復』(マルコーシュ・パブリケーション、1995年)
- セガル、ヨヘベッド(母袋夏生訳) 『ユダヤ賢者の教え』(ミルトス、1991年)
- セントジョン、ロバート(島野信宏訳) 『不屈のユダヤ魂 ヘブライ語の父ベン・イエフダーの生涯』(ミルトス、1988年)
- セントジョン、ロバート(島野信宏訳) 『ユダヤ人の国を創った人』(ミルトス、1989年)
- 曽根暁彦 『アメリカ教会史』(日本基督教団出版局、1974年、1989年)
- 滝川義人 『ユダヤ解読のキーワード』(新潮社、新潮選書、1998年)
- 立山良司 『揺れるユダヤ人国家 ポスト・シオニズム』(文藝春秋、文春新書、2000年)
- 土井敏邦 『アメリカのユダヤ人』(岩波書店、岩波新書、1991年、2000年)
- トケイヤー、ラビ・M 『日本・ユダヤ封印の古代史1』(徳間書店、1999年)
- トケイヤー、ラビ・M(加瀬英明訳) 『ユダヤ五〇〇〇年の知恵』(講談社、+ 文庫1993年、1997年)
- トケイヤー、ラビ・M(加瀬英明訳) 『ユダヤ・ジョーク集』(講談社、+ 文庫、1994年、1997年)
- ナウム、アシェル(河合一充訳) 『子どもが伸びるユダヤ式教育』(ミルトス、2000年)
- ナウム、アシャー(佐藤邦宏訳) 『大使が語るユダヤの生命力』(燦葉出版、1999年)
- 中田重治 『中田重治全集 第2巻』(いのちのことば社、1973年)
- 並木浩一 『旧約聖書における文化と人間』(教文館、1999年)
- 沼野充義編 『ユダヤ学のすべて』(新書館、1999年)
- パルバース、ロジャー(上杉隼人訳) 『日本ひとめぼれ ユダヤ系作家の生活と意見』(岩波書店、同時代ライブラリー、1997年)
- フィッシャー、ヤンケル・ 『成功へのユダヤ発想の秘密』(実業之日本社、1983年)
- プレガー、デニス; テルシュキン、ジョーセフ(松宮・松江訳) 『現代人のためのユダヤ教入門』(ミルトス、1992年、1997年)
- ブラウン、ミカエル(横山隆監訳) 『教会が犯したユダヤ人迫害の真実』(マルコーシュ・パブリケーション、1997年)
- プレガー、デニス; テルシュキン、ジョーセフ(松宮克昌訳) 『ユダヤ人はなぜ迫害されたか』(ミルトス、1999年)
- ヘッシェル、A. J. (森泉弘次訳) 『イスラエル 永遠性のこだま』(教文館、1999年)
- ベンダサン、イザヤ 『日本人とユダヤ人』(角川書店、角川文庫、1971年、1987年)
- 本間長世 『ユダヤ系アメリカ人 偉大な成功物語のジレンマ』(PHP研究所、PHP新書、1998年、1999年)
- 水野信男 『ユダヤ音楽の旅』(ミルトス、2000年)



- 矢部正秋 『ユダヤ式交渉術』 (三笠書房、1990年、1998年)
- 山折哲雄監修 『世界宗教大事典』 (平凡社、1991年)
- ラントマン、ザルチア編 (和田任弘訳) 『ユダヤ最高のジョーク』 (三笠書房、知的生きかた文庫、1994年、1999年)
- レヴィン、メイヤ (岳真也・武者圭子訳) 『イスラエル建国物語』 (ミルトス、1994年)
- 『月刊みるとす』 第51号～第60号 (ミルトス、1999年、2000年)
- 『サピオ』 (小学館、2000年3月8日発売号)
- 『地球の歩き方イスラエル '97・98年版』 (ダイヤモンド社、1997年)
- 『マイクロソフト エンカルタ 総合大百科 2000』 (CD-ROM)
- Bellow, Saul, *Henderson the Rain King* (New York: The Viking Press, 1959)
- Ruether, Rosemary, *Faith and Fratricide: The Theological Roots of Anti-Semitism* (New York: Seabury, 1974, Eugene Oregon: Wipf and Stock Publishers, 1995, 1997)
- Flannery, Edward H., *The Anguish of the Jews: Twenty-Three Centuries of Antisemitism* (New York: Paulist Press, 1985, 1999)
- Twain, Mark, *The Innocents Abroad or the New Pilgrims Progress* (New York: A Signet Classic, 1869, 1966)
- Encyclopaedia Judaica* (Myrtos, 1972)
- The Daily Yomiuri* (Tokyo: Yomiuri Shinbunsha, May 4, 2000)

[2000年10月26日受理]